

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

鬼頭健吾 現代アーティスト
Kengo Kito / Artist



CREATOR^{No}
INTERVIEW 93

鬼頭健吾 Kengo Kito

1982年兵庫県生まれ。大阪芸術大学写真学科を2004年に卒業、その後活動の拠点を神奈川と静岡で制作活動を行っている。近年の主な展示に、2012年 OUT OF FOCUS: PHOTOGRAPHY (Saatchiギャラリー, ロンドン)、2013年A Different Kind of Order (The ICP トリエンナーレ, ニューヨーク)、2015年 NEW DIORAMAS (マイケルホッペンギャラリー, ロンドン) など。2016年秋にサンフランシスコ近代美術館にて個展が開催される。



アーティストやキュレーターと鑑賞者との
プライベートなワークショップを六本木で。

クリエイターインタビュー

『人の発言をどう疑ってかかるかが、アートの姿勢』

published_2018.6.6 / photo_hirokuni nakagawa / text_akiko miyaura

インスタレーションをはじめ絵画や立体など、多様な作品を国内外で発表している現代アーティスト・鬼頭健吾さん。5月26日から27日にかけて行われた六本木アートナイト2018では、作品を通じて儚くも幻想的な夢を私たちに見せてくれました。そのほかに、過去にも2度六本木で行われた展覧会に参加経験を持つ鬼頭さんが、アーティストの立場から、この街とアートの現在地、そして可能性について話してくれました。

少人数での対話で、より一層アートに深く潜る。

デジタルが、工芸が、アートと結びつく時代です。今後アートはますます拡張していくでしょうし、それはそれでおもしろいと思います。ヨーロッパで、"美術"を表す"Art"という言葉が本来指しているのは、"美"ではなく"術"のほうですが、日本は"Art"に"美"を求めている風習がありますね。ですが、学校で"術"は教えてもらえても、"美"を教えてもらえることはない。今後、より美術に深く潜るきっかけのひとつとして、たとえばアーティストやキュレーターと鑑賞者との、プライベートなワークショップ、あるいは講義を六本木でやるのはどうでしょうか。アートとは？という導入から、アートを売る人、買う人のこと、そして実際に高額のアート作品を買うところまで、アーティストやキュレーターと1対1や1対2の関係性でじっくり対話する機会があればいいと思います。定員を募るトークイベントやワークショップ自体はすごく増えてきていますが、そういう開けた空間によって逆に参加の機会を狭めている可能性もある気がするので、少人数であればまた違った角度で深いアート体験ができると思うんです。



「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」

現在進行形の美術の動向に注目するシリーズ展として2004年に森美術館でスタートした「六本木クロッシング」。第2回目となった「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」では、「交差(クロッシング)」の意味に注目し、天野一夫(美術評論家)、荒木夏実(森美術館キュレーター)、佐藤直樹(ASYLアートディレクター)、榎木野衣(美術評論家)の4名のキュレーターによる活発な議論を通して、アーティスト36組を厳選し、日本のアートの可能性を探った。

会期：2007年10月13日(土)～2008年1月14日(月・祝)

場所：森美術館

鬼頭健吾《ロイヤル(多面体)》2007年

展示風景：「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」森美術館、2007年

Courtesy: Gallery Koyanagi and Kenji Taki Gallery

撮影：木奥恵三

あの日、六本木は誰もいなくなった。

六本木はコンパクトな街だと思います。「森美術館」、「国立新美術館」、「サントリー美術館」、「21_21 DESIGN SIGHT」をはじめ、「Taka Ishii Gallery」、「Tomio Koyama Gallery」といった、東京を代表する美術館やギャラリーなどの文化施設と、東京ミッドタウンや六本木ヒルズなどの商業施設が点在していて、そのひとつひとつを散歩しながら巡ることができる、そのスケール感は魅力的です。

僕が初めて六本木に足を運んだのは、2003年に森美術館がオープンして、展示を観に行ったのが最初だったと思います。その後は森美術館での展覧会「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」と国立新美術館での展覧会「アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち」に作家として参加することで、六本木に縁ができました。

「アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち」の作品搬入日のことは、今でも鮮明に覚えています。搬入のための買い出しに行って、地下鉄のホームで、地震に見舞われたんです。そう、東日本大震災が起きた2011年3月11日のことでした。立ってられないくらいに揺れて、周囲もパニックになっていましたが、それでも僕は作品を搬入しなくてはならず美術館に滞在していたのですが、次第に街から人が減っていき、気づいたときには誰もいなくなっていました。

誰もいない六本木。そんな光景、想像したこともありません。まさに日常のなかの非日常。まるで幻覚、夢を見ているようでしたが、それがあの日、現実の世界だったんです。展覧会のオープニングは当然延期となり、僕は当時住んでいたベルリンに戻りました。そして今でも六本木と言えば、あの時体験した誰もいない風景を思い出すのです。

「アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち」

現代に生きる作家たちの新しい表現を紹介することをひとつの使命としている国立新美術館。そんな国立新美術館の学芸スタッフが、国内外で今最も注目すべき活動を展開する作家たちを選抜して展示するシリーズ展が、「アーティスト・ファイル - 現代の作家たち」。その第4回目となった本展では、絵画、写真、陶芸、映像、インスタレーションと多岐にわたりながら、日本人作家と海外作家あわせて8組のアーティストが参加した。

会期：2011年3月19日(土)～6月6日(月)

※東日本大震災の影響により、会期及び閉館日を変更。当初の会期は3月16日(水)から。

場所：国立新美術館

鬼頭健吾《Inconsistent Surface》2011年

国立新美術館、展示風景：「アーティスト・ファイル 2011—現代の作家たち」

撮影：上野則宏



鬼頭健吾 現代アーティスト
KENGO KITO / Artist



published_2018.6.6 / photo_hirokuni nakagawa / text_akiko miyaura

六本木が見る夢を描いた『hanging colors』、『broken flowers』。

幻想や夢と言えば、『街はアートを見る』が今年のテーマとなった「六本木アートナイト2018」に、メインアーティストとして僕も参加しました。アートナイトはひと晩限りのもの。そのことを前提としつつ僕自身、夢とは何かを問いながら、最終的には『hanging colors』『broken flowers』の2作品を国立新美術館で発表しました。ガラスのファサードに引っ掛けたりはずしたり、一瞬の行為で完結するカラフルな布。そしてスイッチを切ると、跡形もなく消えてしまう映像——『hanging colors』と『broken flowers』、それぞれの作品に利用した道具そのものにも、夢の儚さを重ね合わせています。

ちなみに『broken flowers』の最初のイメージは「幽霊」なんです。大学（京都造形芸術大学）の教え子が女の人の幽霊を見たと僕に報告してくれたことがきっかけで、そもそも幽霊とは一体なんだろう？ とか、あれは人間のコピーなのか？ もしも鏡に映った自分の鏡像がイメージとして具現化するなら、そのとき内臓はあるのだろうか？ といういろいろ考え、それを花に例えて『broken flowers』をつくったのです。

六本木アートナイトはお祭りのようなものですね。ある種の徒労感とともに一瞬で終わってしまいましたが（笑）、それが六本木アートナイトの醍醐味だと実感しました。

「六本木アートナイト 2018」

2009年にスタートした一夜限りのアートの饗宴「六本木アートナイト」。今年のテーマは、「街はアートの夢を見る」。金氏徹平、鬼頭健吾、宇治野宗輝の3名がメインアーティストとして参加し、六本木エリアで横断的にインスタレーションやパフォーマンスを展開した。生活の中でアートを楽しむという新しいライフスタイルの提案と、大都市東京における街づくりの先駆的なモデル創出を目的に毎年行われてきた六本木アートナイトは、東京を代表するアートの祭典として成長を遂げている。

会期：2018年5月26日(土)～27日(日)

場所：六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、21_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、その他六本木地区の協力施設や公共スペース



『hanging colors』『broken flowers』

国立新美術館で展示された鬼頭さんの作品。カラフルな布の滝『hanging colors』は、黒川紀章氏設計による美術館のガラスのファザードをカラフルな布ですべて覆った作品。普段は見えるようで見えなかったファザードの形状が見え、日中は外光がその布を通して美術館内部にカラフルな夢を投影した。『broken flowers』は、国立新美術館の正面玄関前に鏡を敷き詰め、花畑



©撮影 木暮真也

の映像を4台のプロジェクターを使って投影した作品。花畑の映像は、美術館の屋根の上に反射することで水玉模様のように分解され、花畑は最終的に色として認識されるだけに変換していくようにした。

アートを通じて街の見方が変わる。

よく取材などで、「土地性や場所性はどのように作品に影響しますか？」と聞かれることがあります。そのような質問が多いのは、生まれは名古屋で、大学進学を機に京都へ出て、その後ニューヨーク、ベルリンで過ごし、東京での短期間の生活を経て、現在は群馬県高崎市に住んでいるという僕の経歴もあるのだと思うのですが、近年、国内外で地域資源を活用した芸術祭が増えていることも理由のひとつだと思います。でも実は僕自身は、土地性や場所性を意識しながら作品をつくることはあまりありません。

例えば今回参加した六本木アートナイト。まさに六本木という土地を活かした芸術祭ですが、僕の場合、土地からインスピレーションを受けて作品をつくるというよりも、自分の作品を通して鑑賞者の六本木という街への見方、意識が変わること、そうなれる作品をつくることのほうに視点が向いています。

もちろん土地と親和性がある作品の展開もおもしろいと思います。でもこの作品によって、街がこう見える。そんな作品がもっと増えていったら、よりおもしろい街に発展するのではないか。"僕の作品で街が変わる"。僕自身はそちらの方に興味があるんです。



鬼頭健吾 現代アーティスト
KENGO KITO / Artist

published_2018.6.6 / photo_hirokuni nakagawa / text_akiko miyaura

情報が人を保守的にさせる。

最近、感じていることのひとつに、アートそのものに対する関心は高まっている一方で、アーティスト志望の若者が減少しているのではないかということ。もちろん子どもの数自体が減少していることの影響はあると思いますが、それでもデザイナー志望は増えるなか、アーティスト志望の若者は僕が若い頃よりも減っているように感じます。

その原因のひとつに、インターネットの発達によって情報が簡単に手に入ることはあると思います。情報イコール結果に思えて、それが人を不安にさせる部分がある。実際はその結果になるかどうかわからないのに、どんどん保守的になる。アーティストは保守的では絶対になれませんから。だから大学（京都造形芸術大学）の授業では、そんな学生の保守的なメンタルをほぐしていくところから始まります。

僕が教えているのは大学院生（京都造形芸術大学大学院）なのですが、僕はそんな学生たちに対して伝えていることが3つあります。ひとつ目は「働くな」。アート以外で働いちゃダメだと。もちろんそれが叶わない環境もあるけれど、「それぐらいの気持ちを持って生きていかなければアーティストにはなれないよ」というような話をします。ふたつ目は「親から援助をもらえ」。というのも学生時代にアートをお金に変換することは無理な話。ならば一番理解してくれるであろう親を説得できないようなら、その先自分の作品で誰も説得できないと思うからです。

学生はみんな強い罪悪感を持つんですよ。働かないと反社会的なんじゃないかという罪悪感を。僕の若い頃はそれがまったくなかったんですけども(笑)。だから3つ目は「罪悪感を持つな」。「アーティストとは社会で認められる存在であり、そういう存在に自分になるということを意識しながら生きてください」と伝えます。すると「今までそんな風に思ったことがなかった」と、目から鱗のような状態になる学生が多いですね。でもそういう覚悟を持つことで、親から援助を得ずともなんとか作品をつくり続ける学生が多くいるんですよ。

学生と言えば、片岡真実さんがキュレーションした卒業制作展にはちょっと衝撃を受けました。従来、卒業制作展と言えば、学生の作品を等価に見せるものですが、片岡さんは自身のテーマに沿って、作品を選んで展示していたのです。ある作品は切り捨てられ、ある作品は選ばれる。それは残酷かもしれませんが、そもそもアートとは平等ではありませんから、学生にその現実を感じてもらうためにもとても可能性に満ちた卒業制作展だと思いました。

片岡真実

1965年愛知県生まれ。森美術館チーフ・キュレーター。ニッセイ基礎研究所都市開発部、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館。近年の主な企画に、「アイ・ウェイウェイ：何に因って?」(2009)、「イ・ブル」(2012)、「会田誠展：天才でごめんなさい」(2012)、「リー・ミンウェイとその関係性」(2014-15)、「N・S・ハルシャ展」(2017)、「サンシャワー：東南アジアの現代美術展」(2017)など。日本及びアジアの現代アートを中心に企画・執筆・講演等多数。2016年度より、京都造形芸術大学大学院教授。2018年の第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督を務める。

ブラック・ボックス化する世の中で生きること。

うちの大学のある教授が、こう言っていました。「今、世の中はテクノロジーによって万能なブラック・ボックスになっている」と。昔はカメラでも何でも、その作動原理を知らなくては使いこなせなかったのに、現代のテクノロジーは、何も知らなくてもシャッターさえ切れば撮れてしまうから、オープン・ボックスではなく巨大なブラック・ボックスを形づくっていると言うのです。つまり、原理はわからなくても、疑うことなく欲望を満たしてくれる現代に、私たちは生きているんです。

先ほど話に出たお金の話、経済的なものとアートやデザインをどのように結びつけていくのか。それはうちの大学でも大きなテーマになっていて、僕自身もアーティストとして考えることではあります。自分の作品を売買するのはシンプルですが、企業や行政などが絡んだ複雑なアートプロジェクトも増えてきています。そういったなかでデザイナーはさまざまな要求をつなげながら応えることがうまいですね。一方でアーティストはそれがあまりうまくありません。というのも前提として、人の発言をどう疑ってかかるのかが、アートの側面だから。やはりその姿勢を大切にしたいですね。

取材を終えて

のびやかで、なにものにもとらわれていない雰囲気を持つ鬼頭さん。それは鬼頭さん自身の作品が抱えた有機性にもつながるようで印象的でした。その一方で、大学で教鞭を取られるときは、ときにシビアにアートの本質を学生に問う姿も垣間見えました。「働かないことに対して、罪悪感を持つ必要はない」、「アートはそもそも平等ではない」。どきっとする視点を、私自身、与えてもらいました。(text_nanae_mizushima)